

---

# 花子とモンスターズ

目田日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花子とモンスターーズ

### 【NNコード】

N8361Z

### 【作者名】

目田田

### 【あらすじ】

何が起きたか、目が覚めればそこはモンスターの跋扈する大陸。唯一意思の通じる俺最強！な相棒に引きずられながら、逃げ足だけは早い女子大生主人公が逃げたり、ボケたり、ツッコミしたり、モンスターとの相互理解に苦しんだりしながら冒險し、女版ターザンへと逞しく成長してゆく のか？そんなお話になる予定。

## アイアムジャパンーズガール

サークルの新歓（新入生歓迎会）だつたんだよ。朝方までカラオケでワーウー馬鹿みたいに騒いで、足もちの先輩がアパートまで送つてくれて。部屋に帰つて、新品のスーツ脱いで、下手くそな化粧落として、うとうとしながら歯を磨いて。起きたら風呂を済ませようと思つて、ベッドに飛び込んだんだよ、うん。

そうなんだよ。多分、帰つた筈なんだよ。

筈なんだよ、筈なんだよ、筈なんだよ……（フロードアウト）。

…「」はどこなの！？

山田花子<sup>やまだはなこ</sup>、これからますます膨らむであろうキャンパスでの新生生活に胸を躍らせ続けていた18歳。おとめ座の乙女、B型。いきなりですが、乾いた風の吹く荒野からどうもここにちは。こちら前後左右、見渡すかぎり赤茶色の岩山だらけであります。天は雲一つなく快晴そのもの。岩陰に避難しているのですが気温は真夏のように暑くて、さつきから汗がボタボタ垂れています。人の気配はなし。

見慣れぬ荒れた大地にて、私、パジャマ一つで素足。場違い感丸出し。

どうやら現在、遭難中のようです。

「…アメリカ？ステイツ？ウエストサイド？」

モニコメントバレー やウエスタン映画で見た光景に近いから、アメリカ西部だと思うのだけれど。一体何の目的があつて一般善良市

民の私をここまで拉致したんだろう、謎のカルト組織は。否、テロリスト集団か。はつ！まさか、どこかの工作員と間違えられたとか。映画の見過ぎか。しかしドッキリや悪戯にしては、やり過ぎだよなあ。

そうか、なんだ、夢だったのか。傍にあつた硬度が高そうな岩に額をぶつけてみる。痛い。当たり前だよね、ぶつけたんだから。念のためもう一度。やつぱり痛い。

おうおう神様、やつぱり夢じゃないのかい。そうなのかい。努めて冷静でいようとふざけてみていくけど、これが現実、だとしたら、かなり、怖いことだぞ。

まずどうやつたら帰れるだろ？

道路や轍、電線や石油のパイプ一つでもあれば、その先にある機関や施設を期待して、沿い歩くことも出来たのに。あるのは自然に均された砂利に、2～3メーターほどの岩と、侵食された岩山と、ちょぼちょぼと点在する枯草だけって、どうこうことなの。いまどきの放置プレイって世界規模の域に達してるの？流行ってるの？流行らせてたまるかテメェこの野郎馬鹿野郎。

飲み物は？食べ物は？

川も池も何もない。枯草じゃなくて青々とした植物の一つくらいあつてもいいのに。どうやって食べるかは置いて、サボテンも無いなんて、どないなつとるんかい。ここ西部劇とひやうんかい。……違うよな、うん。映画はフィクションだ。

自力で歩くにも限度があるよね。水も持たずに炎天下のなか、水平線の向こうまで続いてそうな荒野で、人里を探す体力は皆無に近い。ミイラ化してまうがな。

とすれば、誰かに見つけて貰うしかない訳ですよ。

飛行機、ヘリコプター：こんな荒っぽつかの所で私が分かるのかな。最近のは速いし、よっぽど注意しないと見落とされそう。それ以前にコロを通るのかな。あとはアレだ。不法入国者を感知する機能

とか人口衛星にないのかな。あんだけシャトル上げてるんだし。  
：無いな。アメリカじゃ不法入国者なんてキリがないよね。

オイオイオイ。

どうやつて生き延びれと。神様、あんまりだよ。餓死プレイなん  
て。

「誰か――！――いませんか――！――お――い――！ヘルプミー――！ヘル  
――イ――アイアム、ジャパンーズガーレ――！」

しーん。山彦さえ帰りやしない。静かちゃんですね。これは、寂  
しいなあ……。

……うわ、うわわっ。いやだ、一滴だって水分無駄にしたくないの  
に、だめだこれ、やばい、泣きそう。鼻水出てきた。  
怖い、怖いぞ、これ。怖い。どうじょづ。怖い……。

悲しむ間もなく

ずびずびと鼻を啜りながらパジャマの袖を涙と鼻水で濡らしていくと、なにやら、もぞもぞと動くものが視界に入った。

ると、なにやら、もぞもぞと動くものが視界に入つた。

不思議に思ひながら、瀧む視界を擡げために目をぐるぐると、モリモリモリモリと、5メートルほど先の土が元気よく盛りあがつて塚ほどの小山が出来てゐるじやありませんか。

二〇四

モグラ？ こんな所で？え、テカ過ぎじゃない？と首をかしげながら恐る恐るそのまま様子を伺つてみると、そこから生き物が勢いよ

! ! ! !

十の中から「んにちは。」

それはミルキーなカラーをした、超巨大茅虫（推定額幅1メートル）だった。優しい色合いとは裏腹に、ぐちゃぐちゃとしていかにも「身体器官です」と主張する肛門に似た口が、ぐばあーーと開く。芋虫に牙が生え揃つててどうこうことなの…。ビチョビチョと凄まじい量のエダレが辺りに飛び散った。

キシャア！と高い声を上げた超巨体芋虫は、土から巨体をものともしない早さで這い上がつてくる。まるで蛇のような動きだ。見た目詐欺だ。

目詐欺だ。

私の第六感は告げている。今のキシャアーは「（飯）見つけたアー」、だと。飯とは誰のことだ。飯とは…私のことだよー

全速力で逃げだした私に、超巨体芋虫が素早く後を追う。キシャアアア！大地が震えるような咆哮を合図に、食物連鎖のレースが始まった。

「うわあああ————つ！ ハア、ハア、来ないで来ないでええええ————！」

「キシャア！」

「『待て』……だと!? バカ言うな、待てるか、こなくそ——つ——！」

しつこく追いかけてくる超巨大芋虫（推定全長10メートル）はまだ余裕、依然として速度は緩まず。対して被食者山田花子選手、既に限界、気力のみが頼りの状況だ。ジグザグに走り、侵食岩を利用してどうにか凌いでいる。鬼ごつこの逃げ役は得意なほうだったんだ。えへへ：じゃなくて！

「キシイツ！」

「ハア、ハア……わフ、モヤフー！」

ぬるりとしたもので足が滑り、派手に身体を地面上に打ち付ける。うおおおお何で滑ったああああ！？……液体？……唾液だ！奴のだ！奴がここまで飛ばしたんだよ！

転んだ痛さを堪え忍び、匍匐<sup>ほふく</sup>前进で何とか進もうとすると影が差しこんだ。機械のよう<sup>ヨウ</sup>にちなく顔を上げる。田前で超巨<sup>コウ</sup>大芋虫が私を見下ろす。モダレが私の手の上にボトッと落ちてきた。…ジーザス。

もうだめだ……。一思いに食ってくれ……！

私は大の字に仰向けになり、田を開じた。お父さん、お母さん、それから妹よ。先立つ不幸をお許しください。花子は芋虫の餌になります。ただの芋虫じゃありません。私の知ってる芋虫の常識を軽く凌駕した、やんごとなき芋虫の餌になるのです。きっと田前とともに、現住民の方達に神聖視されていたことでしょう。

ああ、願わくは。死ぬ前に素敵な恋をして、そこそこな彼氏が欲しかつたです……。

ぬるりと何かが、擦り剥いて破れたパジャマから怪我の部分を伝う。ぞくりと、鳥肌が立つた。

チユバチユバチユバチユバチユバチユバ…。

うわぎやああああああああ！？なぶられてる！…これは…！舌だ！？絶対！？なんて太さだ！？なぶられてる！なぶられてるよおお…！うわあああああああああああああああああああああああああ…！

ああ…！…！

「キシー」

「意外と美味しいな」じゃねえええー…………ありやり  
や？そつこえはむちゅから、言葉、分かるんじすかど。

あれ…？

「ひーーー…やめ、やめてーー・ゾワゾワするうううー…」

チュバチュバチュバチュバチュバ…。

と、鳥肌が止まんないよお！大事な何かが削られているような気がしてならない。いや、それより細菌感染とか寄生虫とか大丈夫なのがこれ。なんか凄いパジャマの下がベタベタしてるんだけど、手遅れなのか。…といふかいつまで続くんだろうか、これ。誰か早く何とかしてくれ！

チュバチュバチュバチュバチュバチュッ。

漸く続いていたなぶり舌がピタリと止まり、離れた。や、やっと食つ気になられましたか、旦那。

ビクビクしながら強く目蓋を閉ぢし、その瞬間を待つ。待つ。ひたすら待つ。

長い。

なんだどうしたトイレかと田を開ければ、足元にビル五階分はありそうな超巨大な白い繭が構えていた。おやまあ、白い繭とな。…あれ？芋虫様どこ行つた？

キヨロキヨロと辺りを見渡しても居ないし、土を掘つたような形跡もない。もしかして、もしかしなくて、この繭なんでしょうか。大きさが相当というか、ミルキーな色も…いや、もう、これだろ。これしか無いでしょ。

「…………はっ！コレは逃げるチャンス！」

繭＝動けない。変態中つて一度ドロドロに身体が溶けるんだつけ

か。

すぐさま起き上がり、繭に背を向け、ダッシュ。あれ？足が踏み出せな……何じゃ『らああああああああ！？』糸おお！？いつの間にやられたのか、両足首を覆い隠すように糸が巻かれている。長大で、柔らかいのに信じられないくらい強硬だ。その出でこやはやはりというか、繭だった。

「ふぬぬぬぬ——つ……」

奥歯を噛みしめ、全力で一步を出そうとしているけど。ダメだ、全然先へ進めないし千切れれない。

変態中も尚逃がさぬと言うのが貴様は。チユバチユバは味見だつた訳なのか。私を変態後の食料にするつもりなのか……。変態つてエネルギー使いそうだもんなあ……。知能高そうだなあ、この芋虫……。

日は傾いて、おやつの三時といったところか。1日で一番暑い時間帯じゃないの。体力はとうに限界。今立っているだけで、筋肉がピクピク震えている。喉が渴いた。汗臭い。途方に暮れた私は、大人しくその場に座り込み、恐らくとんでもない姿になるであろう、芋虫変態後のクリーチャーを想像した。

ウルト○マンに退治されそうな怪獣しか想像できない。出来ればファンシーで可愛い、てふてふになつて欲しい。

ぐりゅりゅりゅ。うーん、腹の虫がおさまらないよ。お腹と背中が、くつつきそうです。喉も渴きすぎで、だんだん意識が朦朧としてきた。ヤバいな。

「お腹すいた… のど渴いた…」

…そして寒い。汗で冷えたのもあるだろうけど、やっぱり日が暮れて、この周囲の気温が急に冷えたことが大きい。こりゃ食われる前に死ぬな、私。

もぞもぞと足に巻き付いていた糸が解かれた。逃げられないだろうとも判断したのかね。全くそのとおりだよ。

地面に横たえ、丸くなっていた身体を糸で引き起こされる。…便利な糸ですね。どうやって動かしてるんだろう、それ。

一方で地面へ伸びたいくつもの糸がぐさっと土の中に突き刺さり、奥へ進んでいく。そしてあつという間に、何かを滴らせながら私の口元に近づいてきた。滴っているもの。鉄分がかなり多そうな赤褐色をした、それは水の様だった。

…背に腹は変えられまい。

ほら飲め飲め、と言わんばかりに田の前で揺らされる糸を、思い切ってパクッと口に含んだ。

不思議と味に鉄臭さはなくて、少し塩っぱくて、甘い水だった。  
美味しい、美味しい。

ちゅーちゅー吸い上げ、次々と差し出される水を体の中に吸収する。吃えていた私は、もう夢中だった。

どんなに頭で死ぬと諦めていても、身体は生きたがっていたようだ。それがなんだか無様で情けなくて、命を簡単に諦めたりして親に申し訳なくて、淋しくて、色んなものが内混ぜになり、涙が出て

く  
るのを押さえるため般若の顔を作つ。

いおおおおおおおおおお！折角の水分を無駄にしてたまるか！一度と前の轍は踏まぬ…踏まぬぞおおおお！

やることは限られている。考えなくては、生き延びる方法を。そして、家に帰る方法を見つけなくては。

朝です。

あれ？ 寒かつた筈なのにふわふわしててポカポカしてて、温かい……というより苦しくないか、これ。それに眩しい。うううう。パチッと目を覚ますと、岩山の間から太陽が昇つていました。ネイビーからオレンジイエローと綺麗にグラデーションしていく、見事なマジックアワー、もとい朝焼けです。

空気に昼間の砂っぽさがなく、澄んでいて、清涼感が半端ない。非常に気持ちのいい朝だ。

ラジオのノイズに混じり、体操の神様の声が聞こえるんだ。「さあ今朝もみんなで元気よく始めましょう、ラジオ体操第一～つ！」いま体操せずしていつ体操すればよいというのだ、日本人ならば。元々はアメリカの保険会社が始めたことらしいけど、そんなの全然気にしてない！

…………と思つたまではよかつたのですが。動けません。身体中に糸が巻き付けられています。

どうやら私は、繭の一部となつているようです。地表から離れ、かなり高い位置に糸で縛られています。

「〇二……」

そういうた趣味はないのですけれど、何かに目覚めそうな。この抵抗し難さがまたなんとも……冗談です、ごめんなさい。

びくともしない糸の強度に感心しつつ、なんとか首をひねつて超巨大繭の様子をうかがつた。

とりあえず、繭に摄取口らしきものは見当たらない。糸を触手の

よつに操るから、変態中でも何か食べるのかと思つたよ。

暫らくは食われる心配がなさそうだけど、問題は変態を終えた後だなあ。ひひ、怖や怖や。どんな怪獣が待ち受けているやう。

逃げるとしたら、この繭の中でサナギから羽化した直後になるかな。私は理科の授業の実験で育てた蚕を思い出した。

蚕は繭の中にサナギがある。サナギから羽化した蚕の成虫は、30～40分くらいかけて繭を溶かしながら出ててくる。その時点ではまだ元気に動き回ることができなくて、繭から出たあと羽が固まるのに更に30～40分程かかるのだ。

蚕の変態がこの巨大芋虫にも当てはまるとするならば、蚕の何倍も何倍も何倍も身体が大きいから、羽化して繭から出て動けるようになるまでは相当な時間が掛かって、無防備なはずなのだ。…想像では。うむ、無理やり感が否めないけれど。

繭から突き出るとき、私を縛り付けてる糸の部分も上に近いため多少なり緩むかもしない。それならチャンスは繭から出た直後じゃないか。落とされないように注意もしないといけない。

… そう易々といくかは疑問だけれども、それつきやないんだよね思い浮かぶ方法が。私お馬鹿だし。

とりあえず中が見えない分、音とか、繭の様子とか、観察はこじめにしないと。

…… そういうば、何故か昨日は言葉が通じてたなあ。いっちょ話しあげてみるか。

「ねえ、綺麗な朝日だよね。そう思わないかい、旦那」

「グルル」

「……まさか返事が帰つてくるとは思にもよくなかったよ。サナギつて鳴くもんなんだね」

「グルル」

「……こりゃまた随分と特撮怪獣っぽいじゃなかつた、低い声になつたねえ」

「グウ」

「ははは……もしかして、変態は、もう終わりが近かつたりするの？」

「グルルル、グル」

「…………や、そこですか

…………「とにかく終わつてこる。余計なエネルギーを使いたくないから休んでいるだけだ」、とな。じゃあもう蘭の中は完全体なんですね。動こうと思えば動けるわけですか。

いやは、いやは、いやは、いやは。

いつも自分の知識が現在に起つていてる事象に当て嵌まるとは限りませんよね。うん、真理だ。何が蚕だよ。こんな時役に立てなくて、いつ役立てるというの理科の実験。蚕という金のなる財産を善意無償でくれることじまらず、育成アドバイスというアフターケアまでしてくれた養蚕家のおじさんに謝らねば。

…………じゃなくて。ビルジョア。こりゃ逃げられる気がしない。ど

うしたものかなあ。うへん、うへへん。

相手は怪獣。かいじゅう。かいじゅう、か。

ん？待てよ、かいじゅう？そうだ！そうだよ！

逃げられないなら懐柔すればいいじゃない！幸い言葉は通じているし、話し掛けたら応えてくれる程度には嫌われてないみたいだし。懐柔だ懐柔！怪獣を懐柔だ！怪獣を懐柔だなんてよくそんな上手いこと思い付いたな私！

え？ それでもない？… ですよね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8361z/>

---

花子とモンスターズ

2011年12月28日21時54分発行